

# 研究開発成果実装支援プログラム（公募型） 実装活動事後評価報告書

平成 26 年 4 月

研究開発成果実装支援プログラム（公募型）

プログラム総括・アドバイザー委員会

## 実装活動

名称：医学的機能評価に基づく高齢者の排尿自立支援

期間：平成 22 年 10 月 1 日～平成 25 年 9 月 30 日

実装責任者：東京大学 医学部附属病院 教授 本間 之夫

### 1. 総合評価

一定の成果が得られたと評価する。

湖山福祉医療グループおよび老人保健施設「めぐみ」の全面協力を得て、福祉施設に入居する高齢者に対して、携帯式超音波診断装置を用いて残尿測定を行い、排尿量に基づく自立的な排尿を促す実証実験を実施した。本プロジェクトの目的は、排泄ケアを通じた高齢者の QOL 向上であり、排泄行為を人間の尊厳にかかわる活動の一つと捉え、ケア方法の実践と排尿補助製品の適切な使用を通して、高齢者の心身の健康を図るというものである。この取り組みは、社会実装の実現に向けて重要な一步を踏み出したものの、残念ながら、本方式を全国規模で普及させるという当初の目標は実装期間内に達成することはできなかった。本方式が有効であることは認められながらも、とりわけマニュアルの運用主体となる関係機関との調整に多くの時間を割かざるを得なかったこと等、様々な困難が伴ったことが原因であると推測される。実装責任者が自ら指摘しておられるとおり、ステークホルダーをあらかじめ実装組織に組み込むことができていると、より効果的に実装活動を進めることができたものと思われる。しかしながら、排尿自立支援のマニュアルを 1～2 年の間に完成させ、関係学会からコンセンサスを得ることについて、実装責任者の言質を取ることができており、今後、本プロジェクトが社会実装として発展する可能性は高いものと期待する。

### 2. 各項目評価

#### (ア) 実装支援の目標の達成状況

達成されたが、限定的であると評価する。

実装活動では、高齢者の自立的な排尿を促すための取り組みを実践し、国際禁制学会において排尿機能評価に基づく支援の必要性を提唱した。ただし、収集したデータをマニュアル化し、排尿自立支援の新たな方法論を全国の高齢者保健施設に普及させるまでには至らなかった。そのため、目標の達成状況については限定的と評価せざるを得なかった。本プロジェクトの研究領域は、多様な意見が混在している分野であり、関係諸学会を糾合し取り纏めることに多くの時間を要したことで計画の一部が遅延したものと推測される。実装メンバーは、現在も根気強く普及・運用のための働きかけを続けており、マニュアルが完成されれば、当初の目標達成に大いに近づくものだと考えられる。

#### (イ) 実装支援終了後の実装の継続及び発展の可能性

可能性があるとして評価する。

実装先である湖山福祉医療グループと老人保健施設「めぐみ」をはじめ、東京大学医学部老年看護学教室、同コンチネンス医学講座、東京都健康長寿医療センター、国立長寿医療センターと協働で、高齢者の排泄自立支援に関する方法論について、マニュアル化に向けた準備が進行中である。すでに、東京健康長寿医療センターから、本プロジェクトが提唱する排泄ケアを実施したいとの申し出もあり、効果を認めた機関からは導入について前向きな反応がでている。実装活動の実績を早期にマニュアル化し、普及させることができれば、今後の見通しは明るいものになると考えられる。

(ウ) 組織体制は適正であったか

一部適正でなかったと評価する。

湖山福祉医療グループおよび老人保健施設「めぐみ」から全面的な協力が得られたことによって、排泄ケア方法の有効なデータを収集することができた点は評価される。しかし、実装活動を横断的に展開させるための組織体制については、さらなる検討が必要であった。実装活動の開始とともに、ステークホルダーを組織内に取り込むことができているならば、排泄支援マニュアルの作成から普及まで、遅滞なく進めることができたのではないかと推測される。また、排泄自立支援を実施することによって、現場の医師や介護者への負担が増加するのではないかとこの点が当初から懸念されていたが、具体的な改善策を提示するには至らなかったことが大変惜しまれる。排泄管理の実施を通して、現場の介護者がどのような恩恵を受けることができるのか、明示することができれば、より発展性のある組織体制が構築できた可能性も高い。

3. その他特記事項

実装活動を効果的に推進するためには組織体制の一部見直しが必要であったと思われるものの、科学的根拠に基づく高齢者の排泄ケアという取り組みは、現場のスタッフにとって貴重な経験となったという点は特筆すべきことである。実証実験に協力してくださったスタッフにとっては、通常業務に新たな作業が追加されたことで、一人ひとりの負担が大きくなった。それにもかかわらず、実装活動への参加を契機に高齢者の排泄ケアについて積極的に学びたいと考える方が増えたという喜ばしい報告があった。実装責任者もまた現場のスタッフとともに議論を重ねる過程で、意欲のある看護師に学会発表を行わせる等、人材育成にも積極的に取り組まれた。多様なステークホルダーが、高齢者の排泄支援に関する取り組みに対して大きな関心を寄せていることは間違いない。本プロジェクトの社会実装はスタートラインに立ったのであり、今後は、現場から寄せられた声を参考に前進していただくことを強く期待する。

以上